

---

# 真夏の夢

相櫨りわ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夏の夢

### 【Nコード】

N8964E

### 【作者名】

相槿りわ

### 【あらすじ】

孤独な女の子、鈴奈。そんな彼女が海に出ると、いきなりナンパに襲われる。ナンパから救ってくれたのは見たこともない男の子。その子と一緒に一日を過ごすうちにだんだん良いところが見つかり始める。しかし意外にも男の子の正体は           ？初恋物語。

## （前書き）

初めて短編を書いてみます。

良かったら、読んでみてください。

ぐうたら鈴奈の一日なので、話も結構ぐうたらに進みます。

ちなみにこのお話はあたしの夢を元にしてかかれています。もちろん夢とまるっきり同じではなくちゃんと（？）美化しましたので（笑）

わたしは、そう、わたしは・・・

あんな奴気にならないって

思っていたのに・・・

あの時、気晴らしに海に行ったのが間違いでした。

わたしは、独りぼっちでした。

何時でも何処でも誰にも馴染めなくて。

そんな自分が嫌になることはなかったんだけれど・・・。

そのとき、沖では魚を網で取っている真っ最中でした。

「おう、珍しいね、鈴ちゃん！」

鈴って言うのはわたしのこと。

本名は鈴奈だけれど、漁業をしているわたしのお父さんの友達はその呼びます。

そのとき声をかけてきたのは松原って言うおじさんで、わたしと特に仲良くなってくれた人。

「はい！ちょっと気分を変えに来ました！」

「そうかい！リフレッシュか。いいねえ！鈴ちゃんも少し遊んで行ったら？」

「いえー」

丁重にお断りして、会話を終わりにし、海の家の方に行きました。  
「鈴ちゃん！久しぶりだねえ！今日はフライドポテトがうまく揚が

ったんだ。食べていけない？」

「は」

売店のおばさん。

「・・・む」

いつものように混雑している海の家の中、いつもあいているはずのわたしの特等席が、3人の男女に取られています。

「な・・・」

あたしはどうすることもできずに、そこに立っていました。

そうしたら、大柄の肌の焼けた男性にぶつかられてしまいました。

「つてえな!!」

「? あっ! すつ、すみませんっ」

「んー? あれ? 姉ちゃん、可愛いじゃん。一緒に遊んでかない?」

・・・ナンパ?

「い、いえ・・・わたしは」

「いいじゃん。一緒に遊ぼうよ」

しつこい。

「いえ・・・」

と。

急に片手をつかまれた。

「は?」

「すみませ〜ん! この子僕の連れなんで〜!!」

見ると横には見たこともない男の子が。

「ツんだよ・・・彼氏持ちかよ! 先に言え!」

勝手にキレて行っちゃいました。

「孤独・・・」

「ねえねえ君！」

「え？あ！」

肩を叩くはあたしをナンパから救ってくれた男の子。

「あの・・・？」

「ここはこういうのよく出るから、気をつけたほうが良いよ！」  
・・・知ってます。恐らくあなた以上に。

「はい・・・」

「それはそうと・・・僕らとお茶してかない？」

ナンパ再び！！！！

「いえ・・・」

といおうと思ったら、よく考えてみればその子、わたしの特等席取った張本人なんですな！。

となれば、断るわけにも行かず。え？どうしてかって？だって負けるの嫌じゃないですか？

「はい・・・」

OKしちゃいました。

「やった！僕、リュウ！長内龍って言うんだ！」

「幼い竜・・・？」

「・・・とにかく、おいで？」

「はい・・・」

強制連行されました。

いえ、いいんですけどね？別に・・・

あのグループの方たちは、みんな個性の強い方ばかりでした。

端にいる女の子。

水夜 <sup>みずよ</sup> 有還 <sup>うかん</sup>ちゃんって言うんです。はい、水羊羹ちゃんですね・・・

可愛いんだけど、何故かしやべり声が大阪弁なんです。

「よろしくな、リンナー!!」

早速呼び捨てにされちゃいました。

それから、中心に座ってる女の子ですが、良<sup>らい</sup>椅<sup>す</sup>佳<sup>か</sup>麗<sup>れい</sup>ちゃんです。ラ  
イスカレーちゃんです。

しゃべり方は何故かすべて「にゃん」で構成されてます。たまに違  
うの入ったりしますが大体それ。

「にゃん、にゃん、みゃふ」

みたいな。解読不能です。願わくば日本語でお願いしたい。

その中で長内龍君は、特に変わったところもなく。

強いて言えばわたしを特に気遣ってくれるところとか。

「ラムネいる?」

「カキ氷は?」

「泳ぐ?」

みたいな感じに。

水着を持ちあわせていないわたしは首をぶんぶん横に振りました。

個性派キャラの揃ったこのグループの中で、わたしは一体どうされ  
てしまうのでしょうか?

悪夢はこの一言から始まりました。

「いいじゃん!おようよ!!」

嗚呼、その一言が今となつてはにくいです、龍君。

押しに押されたわたしは龍君に水着を一着進呈していただき、何故  
か泳ぐこととなってしまいました。

「え、ちょ、まっ・・・!」

海辺育ちなのに泳ぎがそこそこできない(嘘です。全然できません)

わたしは全身全霊で反対しました。

でもそんなわたしの儚い思いが通じるはずもなく。

めっさフリフリの白いビキニを買っていただきました。

「わ〜〜〜・・・（絶）」

「可愛いよ！似合う！」

それは、有り得ない。わたし、フリルやレースの服を着ると、みんなに「似合わないよ」って言われるし。

自分でも自覚あるんです。わたしみたいな地味な子がこんな服に合わないことくらい。

胸だっけないのに。

「いや、いやです・・・貧乳のわたしを見ないで・・・」

でも龍君は「似合う」って推すんです、わたしを。

水羊羹ちゃんやライススケーちゃんのほうが絶対ナイスバディなんですよ？わかりますか？このプレッシャー！。

しかも、これで外に出て、海に入るんです。わたし、小さい頃から水は苦手なのに。浮き輪持たないで水に入ったことなんて、一回もないんですよ？

結局わたしは水に入りました。空気袋もなしで。

「わ」

水が肌に触れたとたん、水の恐怖が湧き上がります。

「大丈夫？水怖いのか？」

しきりに龍君は気にかけてくれますが、あなたが無理に入らせتانですよという思いで心はいっぱい。

いえいえ、いけませんこんなことを考えては。

彼だってわたしのことを考えて言ってくれているのです。

わたしだって期待に沿えるようにがんばらなくてはいけません。

と思って少し深いところまで行ってみたけれど、やはり身体が拒絶するんです。

腰まで水がくると、固まって動けなくなってしまうたんですよ。



どうしよう。悩んでいると、ふいにさあっと身体が上昇しました。

「な・・・？」

後ろを見てみれば、龍君がわたしを姫抱きしていました。

「大丈夫？今体固まってるでしょ。初めは浅いところから、僕とゆっくり行こう」

「あ、は、はい・・・」

何故かそこから、わたしの視線は龍君から動かなくなっていました。

彼がこっちを向いて、目があって微笑まれると心臓が跳ね上がった  
り、近くに来るだけで正体不明の羞恥に顔が火照ったり。

『わたし、どうかしちゃうったんでしょか・・・』

心の中を小さく早い動悸と共に疑問が駆け巡ります。

でも本当に、どうしたんだろう。

ビーチバレーをしたときも、水慣れのために水に沈んでみたときも、  
龍君を見るたびに動悸が襲ってくるんです。そして天使が持つてきた悪夢は、あのときに起きたんです。

それは、水羊羹ちゃんとカレーライスちゃん（あれ？ライスカレー  
だったけ？）が帰ってしまつて、わたしと龍君だけが取り残されたあ  
とでした。もう日もだんだんと落ちかけてきて、世界が夕焼けの優  
しい色に包まれてきていた頃でした。

「ね、リンナ。一緒に見たいものがあるんだけど、良いかな？」

「え、はははははい」

極度の緊張状態に陥っていたわたしはすんごいどもりました。

「じゃ、いこう」

わたしは突然手をつかんだ龍君に引っぱられて、崖の岩場を登るこ

ととなつてしまったのでした。

「わ」

足を滑らせでもすれば、彼はぎゅっと抱きとめて、動悸がすごいスピードで・・・

「大丈夫?! しっかり!」

いや、このふらついてるのはあなたのせいなんです。

やっと崖の上に登りきつて、「こっち」と龍君が誘うので、行きました。

そこでわたしが見たのは・・・

「わぁ・・・!!」

沈む夕日とクロームオレンジに染まった蒼い海。

岩の陰から見るにはとても神聖すぎて、綺麗過ぎて、素敵過ぎる景色でした。

「ね、素敵でしょ。これを、君と一緒に見たかったんだ」

龍君はわたしの横で囁いてくれている。

そのとき、わたしの心をよぎった強い影は、ひとつの小さな単語でした・・・

スキ

次の日。

龍君に会いたくてまた海辺に行きました。今日は浮き輪を持って。

「おう、珍しいねえ、鈴ちゃん!!」

松原さんが声をかけてくれます。

「今日は会いたい人がいるんです」

「いいねえ。青春だ」

「ばかあ」

ひとしきりの会話を終わらせたわたしは、あの海の家に行きました。  
でも・・・

いつもあいていて昨日だけはふさがっていたわたしの特等席は、また空っぽになってしまっていました。

「え」

一瞬にして、頭が真っ白になりました。  
と、そのとき。

「リンナ」

声がありました。

よく知っている、ちょっと低めのあの人の声が。

風のようにどこから流れてきたその声は、わたしの頭を駆け巡り、消えてゆきました。

「龍君ッ?!」

叫びました。

「リンナ」

「リンナ」

「 リンナ 」

よく知っている二つの声も混ざりだしました。

「何処！？何処なのっ・・・?!」

いろんな人が叫びながら走るわたしをじろじろ見ます。  
でも今のわたしにはそれは関係のない出来事なのです。

全然気になんてなりませんでした。

ただ、龍君に会いたい一心で。

声がしていたのは、松原さんのいた浜辺。松原さんは船に乗っていて、今張ってあった網を引つ張りあげようとしているところでした。  
「まっ、松原さん！！その網、引き上げるのを待ってください！！」  
「およ？どうしたんだい？青春の次は漁に目覚めた？」  
「違います！その網、岸に寄せてーッ」

まさかとは思いながらも、わたしは必死でした。

だって今も鳴り響いているこの声は、よほどの耳鳴りでなければこの網の中からしていたのですから。

「龍君！いるの！？いるの!?!」

網を引き寄せてしきりに揺らします。

何をしているのかと疑問の目で見る松原さんを気にも留めず。

「リンナ ……ここだよ……」

「ッ ……龍君……ッ」

「ごめんね・・・僕は半漁人なんだよ・・・昨日はどうしてもずつと前から好きだった君にあいたくて、有還と佳麗を連れて人の姿になった・・・でもうつかりと昼寝していたらこんなことに・・・情けないよね・・・」

そんな・・・！

わたしは予想外の告白に驚いたけれど、今は       ツ。

「ふ、二人は無事なんですか？！」

「うん。有還は無理やり出ようとして背びれが破れたけど。佳麗は人の姿になって陸に上がったから無事。誰も死んでないよ」

「！！！！だ、ダメですって・・・！逃げて！ほら、穴を大きくしますから・・・！」

「リンナ。今逃げてももうこれから君とは会えないんだよ・・・？半漁人の秘密がばれたから」

それを聞いて、張り裂けるような胸の痛みを覚えました。でも滲みくる涙を振り払って、叫びます。

「それでもいいです！いいから、生きてください！逃げて、生きて！また縁があつたら会えます！」

「ちよつと待って、リンナ。一つだけ、伝えたいことが       。」

「逃げて       」

「聞いて。僕、リンナのこと       」

「ほら・・・」

「ずっと好きでいるよ！！！！」

わたしはびっくりして龍君を見つめました。

その龍君は今、人型になって水の中から首を出しています。

ふつと、わたしは微笑んでみました。

「・・・わたしもです」

そしてどちらからともなく顔を近づけ、口唇の重なる感触を感じま

した。

こうして、わたしの1日だけの初恋は幕を閉じたのでした。

終

（後書き）

いかがでしたか？

ぐうたらでごめんなさい。

しかも中途半端な終わり方ですね。

もし人気が出たら続編も書こうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8964e/>

---

真夏の夢

2010年10月17日04時48分発行